

# 訪問・終末期医療 奮闘ぶり出版

# 最期までその人らしく

がん患者の在宅ホスピス医療などに取り組む「斎藤内科クリニック」（新潟市中央区高志）の斎藤忠雄院長（57）が、これまでの実践をまとめた著書「『いのちの最期』を生きる」（現代書林）を出版した。がん患者や高齢者が住み慣れた家や地域で最期を生きるために、斎藤院長が訪問医療や終末期医療に取り組んできた奮闘ぶりが描かれている。

【小林多美子】



斎藤院長は新潟大医 外来診察は午前のみとする。クリニックに隣接 学部を卒業し、94年に し、午後は主に訪問医 する「ケアステーション クリニック」を開設。 療で地域を回ってい んるびなす」などで地

「『いのちの最期』を生きる」を出版した斎藤忠雄院長—新潟市中央区の斎藤内科クリニックで

## 新潟のクリニック院長・斎藤忠雄さん

域密着型の介護に取り組み、在宅ホスピス医として年間約50人のがん患者らを在宅でみとっている。昨年は、地域の開業医や訪問介護ステーション、薬剤師らと共により連携を図るためのネットワーク「いいがた在宅ケアねっと」を発足させた。

斎藤院長の考える地域医療のあり方は「風邪くらの病気でも診てもらえる掛かり付け医が終末期をみとれるようになれば、安心して居心地の良い場所でその人らしく、いのちの最期を生きることが出来る」といふことだ。タイトルは、末期がん患者や高齢者の最期の日々は、死を迎えるためにあるのではなく最期までその人らしく「生きる」ためにあるという思いを込めた。

斎藤院長は「模倣、蓄積、創造」が信条という。素晴らしいと思った取り組みは積極的にまねし、そこから次のアイデアを生み出していく。著書でも、県内外の先進的な取り組みを次々と自身のクリニックに取り入れていく姿が描かれている。

斎藤院長は、この本を特に開業医に読んでもらいたいと言う。「地域によって実践の仕方は変わってくると思う。この本を読んで、まねして、新しいモデルをどんどん作ってほしい」と願っている。定価1300円（税抜き）。